



日本野鳥の会は、「野の鳥は野に」をスローガンに野鳥を通じた自然保護活動を行い、会誌として「野鳥」を年11回、一般向けに「Torino」を年4回発刊。



日本野鳥の会は、全国の都道府県に計90の支部があり、会員・サポーターは4万6千人。

野良仕事とは、野を良くする仕事

紀伊半島は渡り鳥たちのサンクチュアリ。魂が引き寄せ合うような自然と出合い、守り育てる。一人旅をする柳生家の家訓から和歌山の方角性を覗いてみた。

仁坂知事(以下仁坂) ●柳生さんは俳優としてはもちろんですが、日本野鳥の会の会長としても活躍されています。まずは野鳥の会の活動についてお聞かせください。

柳生博氏(以下柳生) ●野鳥の会はもうすぐ80周年を迎えますが、北は北海道から南は沖縄まで支部があり、大変嬉しいことに多くの方に知っていただいています。仁坂知事は昆虫少年だったとお聞きしましたが、知事のような昆虫好きの子どもが歳を重ねると、鳥に恋するようになり、野鳥の会に入会するというメンバーが結構います。

仁坂 ●そうですか。でも私は今も昆虫少年ですが…(笑)。ところで最近はずバメが減っているそうですね。

柳生 ●よくご存知ですね。多くの人がずバメが減っているとの情報が寄せられています。アスファルトやセメントが大地を覆い泥や水たまりがなくなり、ずバメたちが巣を作りにくくなっているのがその理由のひとつだと考えています。人間と自然の付き合い方は変わりましたが、鳥たちの遺伝子はそう簡単には変わりません。

仁坂 ●ところで、野鳥の会和歌山県支部の皆さんから聞いたのですが、和歌

山は多くの渡り鳥が飛来し、また旅立つて行くような中継点なのとか。

柳生 ●一部の渡り鳥たちは、例えば東北や僕が住んでいる八ヶ岳などから飛び立ち、紀伊半島で一時休憩をし、それから淡路島等を通りさらに南下します。そういう意味で紀伊半島は渡り鳥の大事な中継地なのかもしれませんね。

紀伊半島の複雑な等高線に憧れていた

仁坂 ●柳生さんと和歌山は以前から浅からぬ縁があると聞いています。

柳生 博(やぎゅうひろし)

1937年1月7日茨城県生まれ。俳優として活躍する傍ら、現在の山梨県北杜市大泉町に居を構え、作庭活動始める。1989年ギャラリー・レストラン「八ヶ岳倶楽部」を開設。2004年4月17日「日本野鳥の会」第5代会長、同年12月12日に発足した「コウノトリファンクラブ」の初代会長も務める。

知事対談

柳生 博 × 仁坂吉伸

日本野鳥の会会長
俳優

和歌山県知事



ろん熊野古道に何本もあります。役者として売れ始めた35年程前、家族で引越し先を探していた時。じいさんの「野良仕事をしなさい」って言葉を急に思い出し、再び八ヶ岳を訪れました。しかしその思い出の土地は開発が進み人工林に…。がっかりしながら山中を歩いていると、なんと13歳の時の「僕の木」だけが残っていたんですね。

仁坂●まるで魂が引き寄せ合ったようですね。それから八ヶ岳倶楽部ができました。

柳生●友人たちに手伝ってもらい植林されていた木を切り、八ヶ岳倶楽部の屋根裏に住みながら、地元の方から落葉樹や土をいただき土地の改良から始めました。少しずつ理想的な雑木林に変わりはじめた頃、多くの人たちが従来の人工林開発に疑問を持つようになり、新しいランドデザインに関心を向け始めたのです。そういえば和歌山の中辺路に鎮守の森の保護を訴えた南方熊楠が守った大きな木がありますよね。

優しい混沌。和歌山には図鑑が埋もれている

仁坂●野中の一方杉ですね。熊楠は日本で初めてエコロジーという概念を説いた人物です。田辺市に彼の研究資料等を展示するだけでなく、研究者に広く所蔵資



左／熊野古道中辺路の継桜王子境内に茂る野中の一方杉。神社合祀の伐採から南方熊楠が守った。 右／熊楠の所蔵資料を保存・研究する為に建てられた南方熊楠頭影館。住所／田辺市中屋敷町36 電話／0739-26-9909

知事対談

柳生 博 × 仁坂吉伸

日本野鳥の会会長 俳優

和歌山県知事

柳生●10年以上前になりますが、番組の収録で何度も訪れました。熊野古道をはじめ県内至る所にお邪魔しました。親戚のような親近感を覚えています。実は柳生家には13歳になったら「一人旅をする」という家訓があります。子どもの頃の僕は、地図を見るのが好きで、紀伊半島の複雑な等高線を見て、ここにはきつと、宝物がたくさんあるに違いないと憧れていたんです。でも当時は蒸気機関車の時代。あまりにも遠すぎてあきらめました。だから仕事で訪ねた時は、はじめてなのに懐かしいというか…。

仁坂●少し遠方に住む親戚ですね(笑)。それで実際はどちらに行かれたのですか？
柳生●さらに地図を見ると、等高線がグニャグニャと複雑になっているところを見つけた。そこが八ヶ岳だったのです。そして旅立ちの朝、子どもの僕はドキドキワクワクですが、両親は心配で泣くんですよ。何といつても1ヶ月間ですからね。

仁坂●1ヶ月間？それも13歳で一人旅。凄いですね。
柳生●当時の小海線はまた風情があった。蒸気機関車で八ヶ岳を登るのですが、山が急なのでまっすぐ上れない。そこで一端引き込み線に戻り反動で上っていく「スイッチバック」を繰り返すのですが、あるところで機関車が動かなくなり車掌さんが「機関車が坂を登れないから皆で押して

料を公開し、学ぶ場を提供する南方熊楠頭影館という素晴らしい施設があります。
柳生●熊楠は日本を代表する博物学者で、そういった意味で和歌山は新しいブランドデザインの先進地であつたのですね。僕はいつも和歌山は図鑑で埋もれているようなものだと思います。
仁坂●そうです。紀伊半島の森は常緑広葉樹林の中に落葉樹林が混在し、海岸沿いに高山植物がある一方で、本来海岸線に自生する備長炭の原料であるウバメガシが山中にあつたりします。私はこれを「優しい混沌」と呼んでいます。

柳生●なるほど。また渡り鳥がそれらの種子を運ぶのに一役買ったとも考えられますね。紀伊半島は渡り鳥たちの大事な中継地点ですからね。野鳥の観察にはある種の定点観察が必要です。例えば春の繁殖期はペアを形成するために同一種で行動しますが、冬は一定の種が混じり合って生活したりします。これを混群といいます。そういう季節ごとに異なる鳥たちの暮らしぶりを見ながらビールでも飲んで…。いいでしょう？それが八ヶ岳倶楽部の理想なんですよ。

仁坂●私のような昆虫少年ならずとも自然好きにはたまりませんね。熊野古道の語り部さんの中に、その地域の歴史や民俗学だけでなく動植物にも詳しい方が沢山います。そういう語り部さんと歩くと本当に楽しいですよ。

下さい」って言うんです。
仁坂●なんだか素敵な時代ですね。
柳生●でしょう？当時、八ヶ岳の住民はそうそう贅沢できないのに野宿する僕を見かけ、「なにやってんだ。ぼうず」って声を掛けてくれ、ドラム缶のお風呂とジャガイモの晩ご飯をご馳走になりました。その代わりに僕は野良仕事を手伝いました。

魂の置き場所、八ヶ岳と出会う。

仁坂●野宿ですか？それもまた凄い。でも13歳で野良仕事などできたのですか？

柳生●もちろん。その頃既に野良仕事に関しては大人並みでした。僕は祖父母に可愛がられて育ちましたが、そのじいさんがいつも「野良仕事をしろ」というんです。草刈りや間伐はもちろん田植えとか。まあ昔の子どもは皆そうでしたけどね。じいさんには「野良仕事っていうのは野が良くなる仕事だよ！」ってよく言われました。

仁坂●いい言葉ですね。そういうこともあり八ヶ岳に住むことになった訳ですね。

柳生●そうですね。それと一人旅の時に決めた「僕の木」が残っていたということも理由のひとつです。

仁坂●「僕の木」というのは？

柳生●自分とフィーリングが合う木を「僕の木」と勝手に名付けているのです。もち

柳生●八ヶ岳倶楽部にも動植物に詳しいスタッフがいて、「あの鳥はまだこないのですかね」「いや先日もうきましたよ」といった会話をお客さんとしていらっしゃるんですね。オープン当初は「柳生博に会える場所」でしたが、今は「スタッフと自然の話ができる場所」として、日本中から年間10万人以上のお客様に来ていただいています。日本は国土が狭いからなのか、決して滅ぼさず蹂躪せず、人と自然が「いい塩梅」に折合いをつけてやってきました。それが日本の「まほろば」だったのでしょうか。僕が和歌山で一番感動したのは那智の原始林に足を踏み入れた時です。まるでもう別世界でした。

仁坂●私も行きました。まるでもののけ姫の世界ですよ。和歌山県ではこうした美しい自然を大いに売り出して、観光客に来てもらいたいと思っているのですが、その結果いいものが失われてしまっているかもしれません。こうした美しい自然を次世代に引き継ぎ、世界遺産やその周辺の雰囲気を守っていくために自然公園を見直し、景観条例を作りました。さらに「紀の国森づくり基金」を活用して、県民共有の財産として、自然が残っている森林を買い取る事業も行っています。なかなかすごい所が他にもあるんですよ。

柳生●いいなあ。行ってみたいなあ。
仁坂●是非お越し下さい。本日はお忙しいところありがとうございました。